

であることが確認できる。

文化六年の風土記に、村中に館跡があり、館の内という字があつたとあるが、これを古墳時代の地方豪族の屋敷跡とみるか、鎌倉以後の輩名の臣の豪族の館跡とみるかは、既に形が損じてわからない。

清水の豊富さと神社・観音堂の境内の森、それに古墳とあわせて、古くからの由緒ありげな村であることは確かである。

付 寛文五年書上げ

田村山村

一、若松の西北行程八里に有、南北一町四十三間、東西一町四間、家居乱にして図何れとも難記、村建始の年号並名田村山の来由不詳。

一、家四十三軒、竈五十三、男百十九人、女八十七人、馬二十四疋、年々増減あり。

一、田二十五町三反五畝三步半、内一町五反三畝、土色黒真土、四町九反七畝土色黒して砂交、九町一反土色黒野土、五町土色赤して砂交、四町七反五畝三步半土色白して砂交、土色並して黒く、但二分白二分赤六分黒、六町五反中の上、四町中の中、六町一反中の下、四町一反下の中、四町六反五畝三步半下の中、土の位並して中の下。

一、畠六町四反一畝二十一步、内九反三畝土色黒真土、三町五反土色黒野土、一町九反八畝二十一步土色黒して砂交、土色並して黒く、一町上の中、三町四反五畝中の下、一町九反六畝二十一步下の中、土の色並して中の下。

一、早稲少、中稲、晚稲多、糯稲少、大麦、小麦、黍、蕎麥、大豆、小豆、大角豆、麻、菜、大根宜、午菱、芋。

一、高三百五十九石八斗六升、内本田三百五十二石四斗四升、新田七石四斗二升、此取百九十三石一斗一升八合、免五つ三分六厘六毛四八味、年々増減有、

年 貢